

「ことば」をとりのもどそう

秋山 眞兄

映画監督・小栗康平が、9年ぶりに作品(『埋もれ木』)を発表した。この作品には、キララがなそうとしていることと同じ通奏低音が流れていて、私は非常に気に入ったが、それ以上の説明や批評は止めておく。是非、鑑賞してもらいたい。

ところで、小栗康平は、「映像」と子どもとの関係を見据えようとしている。彼はずっと以前から、おそらく映画の仕事をしたときから、「映像表現は文字表現や言語表現とどのように異なっているのか」を考え続けている。映画監督としてあたりまえのことかも知れない。しかし、テレビという映像が家庭に溢れる中で、子どもと映像の関係について危機感をつのらせて来た。彼に中学・高校生に話をしてもらったことがある。彼は初作品『泥の河』(1981年)を題材に、原作(小説)の文章とその場面を撮った映像を比較して、原文にある印象深い重要な部分をどのようなカメラアングルでとると良いのか、あるいは秒あたりコマ数が決まっている映画で、同じ映像をコマ何秒分のコマ数を増やすかどうかで見る側の受け止め方が違ってくる、ということなどを話してくれ。

作曲家・武満徹は『音、沈黙と測りあえるほどに』という覚悟で作曲をしたが、小栗は「映像、言説と測りあえるほどに」という真剣勝負

をしているのだ、ということ私はそのときあらためて理解した。小栗はいう。

＜映像は「作られたもの」「選択されたもの」です。見えているだけのものではありません。日常で見えているものとはいっしょにならないのです。この区分けが、最近つかなくなってきましたね。私が子どもたちに、教科として映像を学んでほしいと思うのは、そうした危機感からです。…… 感覚的であることは、論理的であることと相いれないと思われるかもしれませんが、映像はそこにこそ架け橋を賭けるもの、私はそう思いたいのです。＞

「見えるものを通して、見えないものを思う力」を子どもたちにつけてほしい、ということだ。携帯電話、ウェブサイト、教室の映像設備…、今では映像と文字が入り乱れて発信・受信されているが、消費される映像と文字でしかなく、「ことば」が失われていっているのではなかろうか。そこに「見えないものを思う力」が生まれているとは、なかなか思えない。

子どもたちに「ことば」を取り戻すには、まず現実に生きる人と出会い、ことばを交わすことから始まる。それだけではなく、本物の言説(特に本)と映像とに出会うことが必要だろう。キララでも、そのことを念頭にプログラムを考えていきたいと思う。

スタッフ紹介 ★小原 伸一さん★

2年前から鳥や星の話や、観察の指導してくれている小原さんに聞きました。
—キララにかかわるようになったのは？
高校のときの恩師の秋山先生(キララ校長)から、オイ、手伝えといわれて…。
—いつから鳥や星に興味を持ったのですか？
星は小さいときから。中学高校では天文部。夏合宿では、晴れていれば一晩中ベルセウサ座流星群を観察し、天気の悪い日はマージャンばかりしていました。地学が好きで大学も地学専攻、その調査で山ばかりに登っていて、そのときに野鳥研究会と交流して野鳥や高山植物に興味を持ったんです。
—今は、工務店の社長さんですね？
地学の教員になるつもりだったのが、親父の強い希望で家業を継ぐことになってしまい、建築学科に入り直し、親父の跡を継いだわけです。でも、もともと教員になりたかったので、子どもたちと鳥や星を見ているのはとても楽しいですよ。
—この前、白州のお店で写真展を開いてくれましたが、写真もセミプロ級ですね。星の撮影はしていたのですが、30年位前に奥多摩で真っ赤なオオマシコという鳥を見て、鳥のトリコになってしまった。大学時代に鳥や山の自然をテーマに写真を取り始めましたが、動機たことで超望遠レンズも買えるようになり、本格的に始めたわけです。「日本の鳥」コンテストでこの10年間に6回入選するところまで来た、というところかな。今は鳥だけではなく、哺乳類の写真も始めました。秋に動物写真の小さな個展を開こうかと思っています。見に来てください。



キララの本棚 コマさんのお気に入り本・おすすめ本

ベスコフの描く絵本は、決して裕福な暮らしではありません。でも、いつも本当の意味での豊かさを伝えてくれる気がします。登場人物を通して、自然の美しさも教えてくれます。また、人々が丁寧に生活している様子が読む人の心を満たしてくれます。

この『もりのこびとたち』を1回見ると、森での慎ましながらも豊かな四季の生活を楽しむことができます。しかし、2回3回と読み進めると、登場人物の細やかな表情やしぐさに思わず笑ってしまったり、妙に親近感が湧いてくることでしょう。

本に描かれたシダや苔、倒木の感じから、鬱蒼とした森の奥の草や、木の陰で繰り広げられる話だという事に気が付きます。森の湿った、あの独特なツンとした土の臭いがしてきそうです。

この本で一番素敵だと思うのは、最後の「春の森では嬉しい事が起こります。どの家にもどの巣にも、新しい子が来るのです。」というセリフです。希望に満ちた言葉で、話がさらに続いていくことを感じさせます。

そして、もう1つの見どころは、何と言っても生活の道具の素敵なこと！見ていて飽きません。

(河原 駒)



『もりのこびとたち』エルサ・ベスコフ作・絵
おおつかゆうぞう訳 福音館書店

身に沁みて白州/ゴールデン・ウィーク



この黒いもの。これはなんだ？
(答は最後)



油虫(害虫)を食べる「7つ星てんとう虫」(益虫)を
探せ大作戦！ トマトのため？ 売りつけるため？



加工場で「麴作り」
(右奥でゆでているものは？)

夏野菜の「なす」の定植
夏の学校でたくさん食べよう！
定植用の穴あけプロは雄大だ～！



採ってきた野草を料理する下準備

いつも怪しげな企画で子どもに大人気の
小田原社長、今回の出し物は…？



(答) 明け方に行った先は竹林、土
から顔を出したタケノコを採り、加
工場でターチがゆでて、「モウタク
サン」というまで食べたとき！

「午前5時に起きたものだけで行くぞ！」のはずだったけれど、
なんと全員起きてきた。そして、みんなで行った先には…



今回の野草採りは、ヨモギ、ミネバ、セリ、ワラビ、…
日差しと風がとても気持ちがよく、ゆったりとした1日でした。